

本展では、視覚障害者との関わりをきっかけに制作された新作・約 20 点を展示いたします。鶴巻は、かねてから感じていた、見ることへの疑いから、見えない人の世界に興味を持ち、2020 年から視覚障害者の外出をサポートする「同行援護」という仕事に携わるようになりました。

そこで述べ 100 名以上の視覚障害者と関わり、言葉を交わす中で、彼ら独特の言語表現に着目した鶴巻は、その言葉を手がかりに写真を撮り始めました。それは「ガラスは透明ではない」「月は穴ぼこ」「第六感はない」など、晴眼者の鶴巻にとって、彼らの情景描写は新鮮に写り、時にシュールで、時に詩的なものに感じたと言います。

視覚障害者が、言葉や感触、聴覚、嗅覚、空気の流れなどによって、じわじわとイメージが形成されていく過程を体現すべく、本作品は、まず中判カメラで撮影したフィルムをデジタルカメラでデュープ（複製）するという 2 段階の工程を経て制作されています。

視覚障害者という他者の言葉を借りて、世界を覗き見る感覚は、自分が当たり前と思って見ていた世界の輪郭を拡張する試みでもあります。展覧会タイトルの「芝生のイルカ」は、とある視覚障害者の女性の幼少時代のエピソードから名付けられました。視覚に頼った“現実”に縛られないイメージは、自由で創造的です。言葉の断片から鶴巻の解釈によって再生されたイメージから、視覚障害がある無しに問わらず、それぞれの人が捉える“現実”的な違い、搖らぎ、不確かさ、そして、想像の翼を広げることの純粋な喜びを感じて頂ければ幸いです。

会期中の 12 月 10 日（土）には、視覚障害者と写真にまつわるワークショップの運営に長年携わっていらっしゃる、インディペンデント・キュレーターの菅沼比呂志さんをお招きして、ギャラリートークを開催いたします。



© Ikuko Tsurumaki